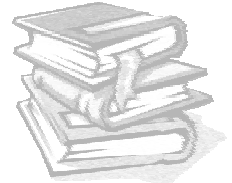




イギリス科ニューズレター

No. 5 August 2002

東京大学教養学部地域文化研究科イギリス地域文化分科
〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1 (8号館 317)
tel/fax 03-5454-6304 (イギリス科研究室直通)
e-mail: british@ask.c.u-tokyo.ac.jp



しばらくぶりのニューズレターです。塚本先生の後を受けて昨年度よりイギリス科主任を仰せつかりましたが、生来の不精者で昨年はどうとう一度もレターをお送りできませんでした。

昨年は敬愛する元主任の成田篤彦先生が定年で退官されました。またイギリス関係では、高村忠明先生も早期退職され、ルネサンス関係が寂しくなりつつあります。さらに塚本先生も来春定年退官です。世代交代の感をいなめません。一方、隣の欄の新任挨拶にあるように、広島大学から安西先生を迎え、教育面が充実してきたことはうれしいことです。

近年、イギリス科でもご多分に漏れず助手の削減を受け、一昨年は浜井さんの後の助手がとれず、囑託として言語の博士課程の塩野君、さらに昨年は地域の博士課程の伊藤航多君が立派に仕事をしてくれて大助かりでした。今年度は幸い助手が復活し、博士課程の渡辺愛子さんを新たな助手として迎え、献身的な仕事ぶりでもこれ大いに助かっています。

新しい出来事としては、木畑元主任が駒場の評議員に選ばれて現在超多忙な日々を過ごされています。昨年度の冬学期に半年間カリフォルニア大学でのんびりされたのがせめてもの慰みでしょうか。ちなみに昨年度は、ウィルソン先生、小林宜子先生がイギリスに在外研究で出かけ留守をされました。学生たちについては、昨年は新3年生が8名、今年が8名と数としては例年になく多く、また AIKOM で海外の大学に出かけた(る)学生も毎年数名ずついて、分科としても活発になっているようです。喜ばしいことだと思います。

(イギリス分科主任・草光俊雄)

新任のごあいさつ

安西信一

四月からイギリス科に赴任した教官の安西です。気の利いたことをいう才覚もなく、スペースも限られているので、単純な自己紹介でお茶を濁させていただきます(多分それが一番実利的とも思うので)。

本郷の文学部で美学芸術学を学び、そのまま大学院へ。イギリス一八世紀末～一九世紀初頭のピクチャレスクの美学について修論を書き、博士論文はイギリス風景式庭園について、原理的・哲学的な考察を交えて書きました。美学としては恐らく変り種でしょう。指導教官は、本郷の佐々木健一先生。随分、尻をたたかれましたが、ご本人はまだたたき足りないとお感じのはずです(その意味で駒場にいるのは安全)。その後、ラッキーだったと思うのですが、すぐ広島大学総合科学部に呼ばれ、英語やらイギリス美学やら、結構自由に教えました。そこでイギリスのサクセス大にも留学(というほどのものではないのですが)させてもらい、博論の足りないところを補い始めたのですが、大量の一次・二次資料に接しすぎ、結局收拾がつかないはめに。博論は基本的に一八世紀の美学を扱ったのですが、一七世紀にも足をっこまざるを得なくなり、一九世紀以降にも色気をだして、苦労の末、『イギリス風景式庭園の美学』(東大出版会、2000)にまとめました。これは私にとって、いわゆる名刺代わりの書物ですが、以上の成立事情からもわかるように、まとまりも悪く、出版社の要請もあって省略も多く、にもかかわらず多くのもの

を詰め込みすぎていて、自分では全く満足がゆきません。しかし売れて欲しくもあるし、類書はほとんどないので宣伝したい気もあり、アンビバレントなところ です。

広島には十年いました。私の人生にとって決定的に重要な歳月でしたが、それについては個人的すぎるので省略。そこでお世話になった総合科学部というのは、文系と理系が半々の学部で、駒場と同じく教養部をもとにした学部です。「学際性」という曲者の概念をモットーにした学部で、その影響もあり、私の研究も一見、学際性がありそうに見えるかも知れませんが(拙著は、部分的には、政治と美学を架橋しようとするドンキホーテの試み)。しかしこれは非力な者がやると痛い目にあう典型で、上滑りした最近の悪しき学問傾向の好例(?)になってしまいました。

何でもそうでしょうが、長くいると嫌なことが増えて(見えて)くるものです。それがないゆえか否かは不明ですが、いずれにせよ駒場にきて、全くそうしたことを感じません。スタッフも学生も素晴らしいし、他力本願ですが期待しています。ただ私は、元来、英語教育の専門でもなければ、厳密な意味でイギリスの専門でもないもので、非力な上にかなりのコンプレックスもあり、一緒に勉強させていただきたく思っています。今後は庭園のことを離れ、一八世紀イギリスのヴァーチュオーゾ(趣味人)の美学などやってみたい。最終的には美と徳の問題。一応、哲学的美学を学んだものとして、そういう野心もあります。趣味はジャズ・フルート演奏。何かあれば、遠慮なくご連絡を。



卒業論文中間報告会終了後、全員で

イギリス科の学生

昨年度イギリス科は、5名の卒業生を送りだしました。全員が、メーカー、新聞社、保険会社などへ就職しており、大学院への進学者はおりませんでした。彼らの卒業論文題目は以下のとおりとなっております。

- "Estuary English": A Sociolinguistic Approach
- A National Curriculum ?
- Looking through Alfred Hitchcock: the British Film Industry in the 1930s
- Underrepresentation: Black People and British Film in the 1960s
- Vagrants in the London of the 1860s and 1870s

なお、今年度の4年生は11名(うち3名が秋より留学予定)、3年生は8名です。

卒論中間報告会 in 日光

草光分科主任のご提案のもと、昨年度より卒業論文の中間報告会を一泊の合宿形式に変更しました。昨年の箱根合宿につづき、今年は栃木県日光にて、7月13、14日の週末に行われ、参加者は、教官11名、4年生8名、3年生3名、大学院生3名の計25名でした。初日午後からのプレゼンテーションは、質疑応答もふくめすべて英語で行われ、4年生は各自30分ほどの担当時間内で、ま

ず卒論の概要を発表し、その後ほかの方々からの質問をもとに活発な議論が展開されました。この時期にしては、非常によくまとまっている、というのが先生方からのコメントで、この報告会にむけての4年生の事前努力のあとが伺えます。現時点でのテーマは、文学、多文化社会イギリスの教育問題、労働組合、メディア、フットボールなどさまざまです。

プレゼンテーション後の夕食会では、3年生のイギリス科への歓迎会もあわせて行われました。春学期試験の真最中にもかかわらず、先輩の報告を聞きにきた3年生も、「勉強になりました。来年頑張らなければ」と感想をもらっていました。

翌日、時間に余裕のある人たちは宿の近くの東照宮を見物したり、車で華厳の滝・中禅寺湖方面まで足を伸ばしたグループもありました。

草光教官は昨年から実施されたこの合宿スタイルの報告会を、「一年目はexperience、二年目はcustom、そして三年目はtraditionになる」と形容されましたが、この合宿が今後良い意味でイギリス科に根づいていけば、と思います。



懇親会風景・左手前は木畑教官

駒場新図書館

平成14年度10月より、旧駒場寮跡地に新しく東京大学駒場図書館が開館されることになり、現在図書館の移転作業をはじめとする諸業務が急ピッチで進められています。新図書館には、現在の学部図書館の「学習図書」約30万冊に、イギリス科の属する8号館内図書室所蔵の約20万冊が統合され、これによって、新図書館には前期課程の学生だけでなく、後期課程、大学院生、さらには教官がそれぞれの学習・研究のために集うことになります。今後数年のうちに新・新図書館の増設も予定されており、ゆくゆくは駒場キャンパス内の教管用・大学院生用「研究図書」が相当数統合され、学習環境のさらなる向上・効率化が図られることになるでしょう。

イギリス科ウェブサイト

卒業生のみなさんは、イギリス科のホームページが存在することをご存知でしょうか。これは塚本教官が分科主任でいらしゃったところにおつくりになったものですが、その後しばらく更新されておらず、人目につくこともあまりありませんでした。次回のニューズレターまでには、リニューアルしたイギリス科ホームページをみなさまにお知らせできると思いますので、それまでしばしお待ちください。

イギリス科運営委員

本年度のイギリス科運営委員は、草光俊雄、安西信一、河合祥一郎、木畑洋一、小林宣子、斉藤兆史、田尻芳樹、丹治愛、塚本明子、中尾まさみ、山本史郎、Andrew Fitzsimons、Paul Rossiter、Brendan Wilson、渡辺愛子(助手)です。

住所変更をされた方は、大変お手数ですが、イギリス科までご一報くださいますと幸いです。